CISMOR VOICE 5

Winter 2006

2-9
特集 京都 1

「聖地」としての京都
ミシェル・モール

太秦――カミと仏と一神の交流の地――
長谷川（間瀬）恵美

フォトギャラリー

10-13
パレスチナ・イスラエル問題を考えるシリーズ

14-15
スタッフ紹介

16-17
研究会報告

18-19
CISMORインフォメーション

CISMOR
Center for Interdisciplinary Study of Monotheistic Religions

特集

京都

「聖地」としての京都

Michel Mohr
ミシェル　モール

1992年にジュネーブ大学で文学博士号を取得した後京都に移住し、宗教学の研究に専念。日本近世近代宗教思想史以外、比較宗教学、神秘主義への関心が高い。既成概念の再検討に挑戦することが趣味。

はじめに

現在の京都には残念ながら理想の旧都と違う要素が多い。懐古趣味でなくとも、度々古都にふさわしくない風景を目の当たりにする。各交差点にはパチンコやコンビニが立ち並び、車優先の社会が作り出した主要道路は絶え間無く騒音と共に排気ガスを放出しつづけている。町の外見にこだわると、とても「聖地」とは思えない姿の方が目に付きやすい。

聖地の輪郭

それなら「聖地」の呼称を京都に当てはめることは無理だろうか。この疑問に答えるために、そもそも「聖地」とは何を指しているかを考えねばならない。ただし「聖なる場所」の特徴は、当然ながら信仰形態によって異なってくる。この欄の読者のうち、エルサレムを最たる「聖地」として思い起こす人が多かろう。つまり一神教の一般的な理解では、神から与えられた恩寵が第一の条件となる。では、一神教に属しない仏教や神道の場合、どのような捉え方をするのだろうか。

環境や都市計画の問題から離れ、住民に日本のどこに「聖地」があるかを尋ねると、まず高野山、富士山、あるいは吉野や館山の山名を挙げる人がいる。山には自然の不思議な力が宿るから、または行者がその閑静な所を選ぶからこそ、「聖地」や「霊地」として認識されている。この「自然の不思議な力」の意味するところは、「気」という発想にほかならない。「気」という漢語は日本に道教的な響きと共に導入されたが、それ以前にも類似の感触が存在した可能性が高い。しかし文字が日本列島に上陸する前から「気」を重視する神道の原形があったと推定しても、それを立証することは難しい。

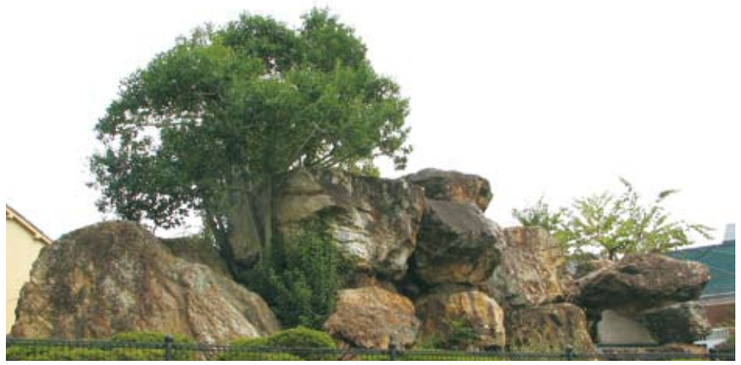
行者が選んだ場所に焦点を当てると、京都の周りの山々には僧侶が籠った形跡が目立つ。たとえば平安時代に高雄山と比叡山には修行道場が開かれてくる。そして比叡山から派生した鎌倉時代の新仏教が現れると、浄土系や禅系の多くの僧侶も新しい教えを広めるため、まず京都に本拠地を置いた。そこから自分が所属する宗派の開祖が活動しはじめた場所を崇める仏教徒は、本山へお参りする目的で京都を訪れている。多くの仏教徒にとって「聖地」が一方でインドにおけるブッダゆかりの名所、他方では高僧が活躍した場所を連想するからである。実践に深入りした人なら、むしろ「聖なるもの」が外的な状況とは無関係の自由自在な精神状態を指すと解釈するだろう。例えば『維摩経』に「直心是道場」とあって、「悟りの場」を意味する「道場」と心境との関連が強調されている。つまり仏教は本来、心理的な次元を優先するが、民間宗教として発展したことも否定できない。特定の場所に「利益」を求める信仰から巡礼などが実際に行われている。

以上の概要から「自然中心」の神道系の形態と「人物中心」の仏教系の形態を大別できるが、この分類をより厳密にすることは欠かせない。そして神仏習合という形で両系統が重なることも珍しくないことは事実だ。しかし、少なくとも宗教史の観点から、奈良時代以降、仏教諸宗の開祖をはじめ京都は宗教の実践、そして思想交流の場として常に中心的な役割を果たしてきたと言えよう。

権力の集中する場所

さらに天皇の存在から都を「聖なる場所」として位置づける時代もあった。例えば禅系諸宗の僧堂では元旦、今上天皇の誕生日のとき、そして毎月の1日と15日に、「祝聖」という行事が現在なお行われている。行事の目的は皇帝の長寿と国家の安定を祈ることだというが、その起源は中国の古い信仰の転用から来ている。古代中国では「天皇大帝」は最初に北斗の神だったが、次第に全宇宙を司る神と見なされるようになり、現在は「泰山府君」として祀られている。中国において国王としての皇帝と神としての天皇大帝は区別されていたにも関わらず、日本では同語が使われてきた。「祝聖」は宋代の『禅苑清規』に初めて登場する行事で、意外と道教的な背景を持っている。

したがって、「聖地」としての京都には3つの主なニュアンスが見つけられる。1)自然が提供する地理上の恵みとその神道的な解釈。2)仏教の宗祖等が開いた本山が集中し、「日本仏教のメッカ」と見なされる側面。3)天皇が明治時代まで住居を構えた都としての性格。



蛇塚古墳。7世紀初頭に築造された、秦氏一族の首長の墓と推定される遺跡。

しかし京都が権力の中心地だっただけに、逆に祭政の圧倒的な存在から逃れたい人も現れた。これは道元が今日の福井県に永平寺を開いた動機とされている。いずれにしても人は京都に対して魅力または嫌悪を感じ、無関心ではいられなかった。ここでは敢えて京都を「聖地」として扱ってみるとき、「俗」対「聖」という二元的な価値判断以前、「聖なるもの」が「俗」を含めて万物に内在していることが前提である。この観点から過去における「聖地」としての性格をさらに追究し、最後に未来における「聖地」の可能性を考えてみたい。

平安京の歴史的背景

平安京への遷都が行われた794年には、その10年前の長岡京への移転の失敗を教訓に、桓武天皇はそれをきわめて慎重に実現させた。すでに前年の正月から藤原小黒麻呂などが地相調査に派遣され、予定地の葛野郡宇多村を綿密に調べていた。不可欠の条件は河川による交通の便、そして四神相応という風水に関わる地形であった。「四神」は東の青竜、西の白虎、南の朱雀、そして北の玄武を指し、中国の古代信仰に基づいているが、調査の結果、候補地がすべての条件を満たしていることが報告された。新しい都の北の基準点として玄武を象徴する船岡山が選ばれ、西には双ケ岡、そして東には鴨川がふさわしい形で平安京を囲んでいるという結論に至った。東西の果てを「京極」と呼んでいたが、その辺りには以前から人が住んでいたことは案外知られていない。

広隆寺

先住民

考古学の進展により、古代史の一部が明らかになりつつある。遷都以前、今の京都の太秦の辺りに住んでいたのは秦という渡来系の氏族であった。彼等は当時、葛野川と呼ばれている今の桂川の上に取水ダムを築いて嵯峨野を農地として利用しながら、養蚕業など多くの新技術をこの地域にもたらした。蚕ノ社はその遺産

の一部を窺わせている。5世紀後半には秦氏が朝鮮半島東部から集団で日本に渡ったと見られるが、広隆寺の有名な弥勒菩薩の思惟像はその高い文化を物語っている。なお遷都の際、前述の藤原小黒麻呂と秦氏との親密な関係は役立ったようである。

当時のもう1つの重要な氏族はカモ氏で、その当て字の「賀茂」と「鴨」が河川名と上下の神社の名称に現存している。カモ氏は平安京以前から葛野の地域に住居を構えた豪族で、その「カモ」の音写が「カミ」（神）を指し、神事を司る一家だったらしい。神社の禰宜（ねぎ）を務め、後に阿部氏と並んで宮廷の陰陽家（おんみょうか）に任命された。この先住民は大和にもいたことから、朝廷に仕える重要な宗教家と見られる。

上賀茂神社の細殿と立砂

桓武天皇

遷都が決まる過程の中で、先住民の協力を得るとともに、長岡京に執着していた反対勢力を押しのけることが不可欠だった。この難しい決断を迫られた桓武天皇は周りの有識者の意見に耳を傾けると同時に、東北への軍事作戦に意欲を示し、政治的な野心の持主として知られる。桓武の別名は山部親王（やまべのみこ）、あるいは柏原（かしわばら）で、白壁王（のちの光仁天皇）の第一皇子として生まれた。『続日本紀』によると母の高野新笠（たかののにいがさ）は、百済の武寧王（ぶねいおう）（ムリョンワン、在位502-523年）を祖先とする百済王族の子孫だったので、当時として「国際的な人」と見なされていたかも知れない。桓武の在位中、空海と最澄は唐に送られ、日本仏教が新局面を迎える時代に当たる。ちなみに804年にこの二僧を同伴したのは小黒麻呂の息子、遣唐使として任命された藤原葛野麻呂であった。桓武の皇后も同じ藤原氏の藤原乙牟漏（ふじわらのおとむろ）で、31歳で亡くなるまで次世代の平城（へいぜい）と嵯峨天皇の母となった。

桓武天皇画像（東京大学史料編纂所所蔵）

長安の模型

平安京が設計された頃、中国の唐代の首都長安が模範となった。東西南北の通りの配列、皇居の位置などは長安に倣っている。朱雀大路が都の中心にあるという点も共通だが、やはり日本独特の地形や社会構造に合わせた点もあり、特に規模と人口に関して比べものにならない。盛唐時の長安の人口が約100万人だったのに対して平安京の人口は15万人以下だったとされている[1]。

京都市の総人口は2006年1月には約147万人（正確には1,472,666人[2]）だったので、都づくり当初に比べるとほぼ十倍に膨らんだ。しかし生活の水準よりも生活の質を考えたとき、本当に向上したのだろうか。

未来における聖地の可能性

これまで過去と現在の京都に目を向けてきたが、少し未来像を考えてみたい。端的に京都を「学生とお坊さんの町」と特徴づける人が少なくない。ところが本気で学問と宗教の交流の場というイメージを謳い文句に使えば、即座に世界の注目を浴びるはずだ。昔の長安が栄えた時代と同様、多くの宗教が何の問題もなく共存する風景を再現することができるなら、花の蜜を嗅いだ蜂のように、この寛大な雰囲気を慕う人が集ってくるに違いない。

具体的なことに話を戻せば、宗教の研究と実践を奨励する体制が必要性だと思う。近代には同志社大学出身の岸本能武太の『宗教研究』（1899年）や彼の友人、姉崎正治の先駆的な研究活動は京都から始まった。最近、宗教関係の私立大学が「大学コンソーシアム京都」という協定を結ぶことによって、宗教と宗派の壁を乗り越えようとする動きは活発になりつつあるが、行政側の認識はまだ低い。この慎重な態度の背景には、戦時中のイデオロギーに対する反省の下、「文化」を「精神形成」から分離させようとする動向が顕著だ。言うまでもなく、それは諸宗教が戦争協力に傾いてしまった記憶から来ている。しかし結果として多くの「文化センター」が語るように、中身を抜きにした安易な「文化」を商品として扱う傾向が強い。たいてい経済効果だけを視野に入れる人々は「観光の顔」以上のことを追求したがらない。

そのような発想とは逆に、私は京都が再び諸宗教を中心にした思想交流のハブになる可能性を考慮に入れるべきだと考えている。ところがその場合、過去のように「日本文化」という限定された情報のみではなく「普遍的な」メッセージを世界に発信しなければ意味はない。「普遍とは何か」という真剣な議論を学際的に、そして実践する宗教家をも交えて行うことが望ましい。それができるなら、古都の「聖地」としての性格が新たに輝いてくる。京都を舞台に、学界以外でも本質的な問題に関する討論が再燃する日が待ち遠しい。

[1]「9世紀の段階では10万－15万人で、それを超えることはなかったと考える。むろん判断の材料があるわけではないが、1つの指標となるのが盛唐時100万人に及んだとされる長安の人口である。平安京の規模はその長安京の3分の1に及ばず、また後述するように、沼沢の多かった右京が早く廃れて左京が主となったこと、その左京にも部分的に同様の条件があったこと、などを勘案し、ほぼ15万人以下とみなすわけである」（村井康彦 1979：35-36頁）。

[2] http://www.city.kyoto.jp/sogo/toukei/m/jinkou.html（2006年9月25日取得）。

もっと知りたい人のために

【参考文献】和書

上田正昭監修、芳賀 徹、富士谷あつ子編『京都学を学ぶ人のために』（世界思想社、2002年）

京都市編 1994年 『甦る平安京　平安建都1200年記念 』（京都市）。

五島邦治 2005年『読む・知る・愉しむ　京都の歴史がわかる事典』（日本実業出版社）。

佐和隆研、奈良本辰也、吉田光邦ほか編 1984年 『京都大事典』（淡交社）。

塚本善隆編 1973年 『望月仏教大辞典』第9巻、「四聖地（ししょうち）」319-320頁（世界聖典刊行協会）。

黛 弘道編 1988年 「中央集権国家への道」安田元久監修『戦乱の日本史　合戦と人物』第1巻（第一法規）。

中村修也 1994年『秦氏とカモ氏　平安京以前の京都』（臨川書店）。

村井康彦 1979年 「唐風から和風へ」「新都平安京の光と影」村井康彦編 『図説　日本文化の歴史4　平安』（小学館）。

村井康彦編 1988年 「平安王朝の武士」安田元久監修 『戦乱の日本史　合戦と人物』第2巻（第一法規）。

山折哲雄 1985年 「聖地」『大百科事典』第8巻、372頁（平凡社）。

山田浩久 2001 年「都城　四神相応の都市計画」山田安彦編『方位　読み解き事典』（柏書房）187-192頁。

【参考文献】洋書

Choudhury, Anuradha Roma. 1998. Sacred Place. In *Themes and Issues in Hinduism*, edited by P. Bowen. London; Washington DC: Cassell.

Reader, Ian. 1994. Japanese Religions. In *Sacred Place*, edited by J. Holm and J. W. Bowker. London; New York: Pinter Publishers; Distributed in the U.S. and Canada by St. Martin's Press, pp. 187-202.

太秦（うずまさ）──カミと仏と一神の交流の地──

長谷川（間瀬）恵美
Mase-Hasegawa, Emi

1970年生まれ。ルンド大学神学・宗教学博士課程修了、博士（神学）。宣教学専攻。現在、南山宗教文化研究所非常勤研究員。著書 Spirit of Christ Inculturated（ルンド大学出版）。

はじめに

「京都は日本の伝統」というキャッチフレーズを見て、不思議に思っても、それを否定する人はいないだろう。けれども、日本の文化、日本の伝統、日本人とは一体何だろうか。異文化交流の英語の授業で "I am a Japanese." と答える学生たちに「日本人」とは何かと問うたところ、「日本語を話す」「日本料理を食べている」「日本で生まれた」「両親が日本人である」等々の答えがかえってきた。しかし、いずれの答えも満足できる答えではない。アメリカやブラジルに住む日系二世、在日韓国人、帰国子女、ハーフの子供たち―今の国際社会に生きる子供たち―は自己をめぐる問題をたくさん抱えている。日本に安穏と生活していると、とかく忘れがちな日本、その文化、その伝統に関する基本的な問題は、自己のアイデンティティを探ることに関わっている。

日本的霊性

自分の体験から言えば、「私は日本人である」ということは、実はその根底に日本古来の宗教心が潜伏していることだ、と私は考えている。それは古神道（アニマイズム）だと言ってもいいだろう。日本人が日本文化の脈絡において体験するもの、つまり日本文化の依拠する精神的基盤、それは日本的霊性にほかならない。神道は古代から現代に続く日本の民族宗教として、長い歴史、伝統を持っている。明治時代は国家神道が強制された時代でもあるが、これは天皇が現人神として祀りあげられるという、特異な一神教的神道の形体と考えられる。敗戦後、国家神道は解体し、現在は神社神道、皇室祭祀、民俗神道、宗派神道の4つが主要な形体とされる。そして今日、日本の若者たちの多くは、このような神道の諸形体に頓着することなく、子どもの時から初詣や七五三で神社へのお参りに親しみ、神道を「宗教」と感じることなく、生活の中に取り込んでいる[1]。神道は、人々の生活に深く関わり、精神生活の基盤ともなっている。今日においても、神社では四季を通じてさまざまな祭礼が行われる。春にはその年の実りが豊かであるようにと祈り、夏には災害や災厄を案じ、秋には収穫を感謝し、冬には春に向けて生命の宿りを祈願する。祭礼は神々と人々の交流であり、感謝の気持ちの表現であり、地域の文化や伝統を継承する「場」として定着している。日本の主な年中行事や祝日は、神道や仏教に関係するものが多い。日本人の一生の節目は、人生儀礼として神々のご加護とその恵みに感謝するという行事―お食初め、七五三、成人式、合格、結婚、安産祈願、年祝い等―で祝される。そのような現実を前にすると、神道を日本文化の基層、見えざる国教として解釈し直す必要を感じさせられる。

神道のカミ

神道のカミの特色は「多の和」である。八百万の神々という言葉が現在も力強く息づいているように、多神が共存する世界観である。神々は他を排することなく、それぞれの場を獲得し、隠れた霊力として現臨する。古来より、日本人は自然の中に霊的な産霊（むすび）の力を感じ、それが人間

を包み育んでくれる、大いなる力であると理解してきた。その霊的な力は自然界に現れる。そこで人々は鎮守の森に神社を置き、神々の依代として祀った。森の木々、河、山、岩、動物は、カミの宿る神聖な場であった。カミは知り得るものではなく、その気配によって感じられるものであった。やがて、神々と人間の関係は、時に友好的、時に主従関係をとるように理解される。カミは人々に穀物等の自然の恵みをもたらすが、時には自然災害として偉大な破壊力をもって怒りをも表す。人々は「祭礼」において神々と交流し、その霊を労った。神々は一時の交流を楽しみ、またあの世に帰っていく。次第に祖先の霊もカミの一つとして考えられるようになっていった。

太秦（うずまさ）の地

右京区太秦の土地には、一神教と関係の深い神社仏閣が現存する。［以下では弥勒菩薩の半跏思惟像で有名な広隆寺、摩多羅神の巡行する「牛祭」で有名な大酒神社、そして日本最古の神社の一つである木島座天照御魂神社（このしまにますあまてらすみむすびのやしろ）を取りあげ、日本と一神教の交流とその興味深い歴史を考察する。］

太秦は秦民族を中心に栄えた。秦民族は朝鮮に逃れた秦の始皇帝の子孫であると言われ、日本に渡ってきた渡来人である。佐伯好郎の『景教碑文研究』の付録に、「太秦（禹豆麻佐）を論す[2]」という論文が収められており、それによると、太秦は471年頃、雄略天皇の時、弓月王（ゆんすのきみ）帰化の秦酒公（はたのさけきみ）が18,679人を伴って居留した土地とされる。その後、太秦には秦人25,000人以上が帰化した。秦河勝（はたのかわかつ）は聖徳太子に仕えた有力人物で、彼は推古天皇から譲り受けた百済の弥勒菩薩を蜂岡寺（太秦寺、現在の広隆寺）に奉っている。現在も、寺の境内には秦氏を祀る社が存在する。

広隆寺から映画村の方に歩むこと数分、秦の始皇帝、弓月王、秦酒公を御祭神とする大酒（大辟）神社がある。こちらの神社は、広隆寺よりも前に建立されている。秦酒公は養蚕技術を伝え、養蚕業を営み、朝廷に絹綿を納めることによって、日本文明に多大なる貢献をなした人物である。献上した際、絹綿が「うずたかくつまれた」ことから、太秦を「うずまさ」と読むという説もある。ちなみに「機織り（はたおり）」は秦氏に由来する[3]。

同じく秦氏によって建設された、蚕の社という名称で知られる木島神社（木島座天照御魂神社）は、日本最古の神社の1つとして数えられる。こちらは天之御中主神を祭神として、600年頃創建された。鳥居をくぐり、拝殿に立つと、左側に本殿、右側に養蚕神社（蚕の杜）がある。本殿の左側に神池（元糺の池）があり、そこに鳥居を3つ組み合わせたような特異な形をした三柱鳥居が建つ。

5年前に訪れた際は、かろうじて池が存在していたが、今は池の水は涸れてしまっている。また、現存の鳥居は約260年前に修復されたものである。「糺」とは「正しくなす」「過ちをただす」という意味で、身の穢れを祓う場所、禊を行って心身を浄める場所である。下鴨神社の糺の杜で行われる御手洗祭が有名であるが、蚕の社では、嵯峨天皇の時代に潔斎の場をこちらから下鴨神社に遷されたという主張から、現在でも「元糺」と呼称している。この三柱鳥居から、秦民族とキリスト教の関係が窺われる。

まだら神の面と杉野栄牧師

景教と秦氏

景教（ネストリウス派[4]）は635年長安に伝来し、大秦景教と呼ばれて多くの信徒を得た。景教の特色としては、次の点が挙げられる。

1)マリアを神母としない、
2)十字架とそれ以外のイコンを用いる、
3)死者のための祈りを捧げる、
4)聖餐式においてキリストの霊在のみを主張する、
5)僧位の八階級を厳守する、
6)法王の妻帯、断食、菜食を推奨する、
7)聖書、祈祷、讃歌はシリア語が原則。

781年に、景浄によって世界最古の碑文の1つ「大秦景教流行中國碑」が建設されている。唐の時代は景教流行の時代であり、都には「大秦寺」（キリスト教寺院）が建設されるまでに流布する。しかし、その後、844年に異教禁制が発布され、禁制の時代を迎える。1625年に「大秦景教流行中國碑」が金勝寺の庭内から偶然発掘され、国外研究者の注目を浴び、景教の研究が再開されることになる。中国においては1860年、北京条約によって禁制が解かれる。

前述の佐伯氏の研究によると、秦氏は景教を信仰していた。秦氏の建立した太秦寺（広隆寺）は、唐の都のキリスト教寺院「大秦寺」と非常に似ているという。ちなみに「大秦」というのはローマ時代のシリア地方の事である。太秦寺の境内には「井佐良井」という井戸（の跡）があり、これは「イスラエル」という意味をもつ。また、大酒神社はもともと「大辟」と書き、それ以前には「大闢（だいびゃく）」と呼ばれていた。大酒神社は大辟（ダビデ王）を祀る神社であり、秦氏は彼らの先祖がベテルに石を立てて以来、異邦に流浪して石を立て、祭りをなす氏族、つまり猶太民族であった、と佐伯氏は解釈している。また彼ら自身が「大王の子孫にして平和なるもの」と自称したことについては、それは当時の史家の主観的判断であった、と同氏は主張する。また、佐伯氏は最後に、禹豆麻佐の禹豆は「光」「東」「文化」「開化」、麻佐は「貢物」「賜物」という意義があると結論している。

この佐伯の研究を受けて、日本バプテスト連盟京都洛西教会の杉野栄牧師は次のような見解を明らかにしている。太秦では「牛祭り」という奇祭が真夜中に行われていた（近年は行われていないようだ）が、これはモーセの出エジプトを祭儀とした名残ではなかろうか。「まだら神」の面をつけた男が牛に乗り、その横を天狗の面をつけた3、4人の氏子達が守り、真夜中に寺を出る。そういえば、天狗の面は鼻が高く、目も耳も異邦人的であるのはユダヤ人の模倣であろうか。秦氏一族がユダヤ民族であり、景教を日本に伝来していたという史実によると、京の都では産業のみならず宗教面でも多大なる渡来文化の影響を受けていたということになる。加えて、日本から中国にわたった遣唐使や空海も、長安において少なからず景教の教えと接触を持ったことに疑問の余地はない。神仏習合を掲げる高野山に「大秦景教流行中國碑」のレプリカが設置されているのも理解できる。思うに、日本文化とキリスト教の交流は、この時すでに始まっていたのではなかったのか。

三柱鳥居

話を戻せば、蚕の社に建つ三柱鳥居は、入り口ではなく、神社の奥に立つ。これは禊の場であると同時に、原始キリスト教の三位一体（父と子と聖霊）を表現しているとも考えられる。しかし、問題は、当時の日本人がそれをどのように受け止めていたか、また如何にそれを神社の中の鳥居として受容したか、である。

『古事記』の神代編には、日本天地開闢の際、まず天御中主神が発生し、次に神皇産霊神（わすび）と高皇産霊神（わすび）が高天原に出現したと書かれている。そしてこれが、造化の三神とされている。この日本の神話とキリスト教の三位一体の教えが習合した形が三柱鳥居だ、と考えることは素直な解釈でないだろうか。「実生化」とは小さな芽生えのことである。杉野牧師は、「ヨーロッパの苗を植えるのではなく、御言葉の種を蒔き育てることの大切さ」を要に京都の地で宣教を続けている。日本人は異文化と出会い、それを受容する際、拒絶、受容、変容、混淆、重層化という「多の和」の歴史をたどっている。日本人の宗教観の根底にあるものをそのまま維持し、一神教的要素をも積極的に受容し、実生化してきた太秦の歴史はそれを見事に物語っている。このように考えて史跡を歩むと、歴史的・宗教的探求心が大いにそそられ興味深い。

蚕の社（木島神社<木島座天照御魂神社>）の三柱鳥居

おわりに

三柱鳥居は日本に1つしか存在しないといわれている。しかし、昨年度（平成17年春）南禅寺の大寧軒（非公開庭園）の茶庭に、石造りの3つの鳥居をみつけた。こちらは蚕の社の鳥居のミニチュアであり、三柱鳥居の下から清泉が湧き出て小川になり、庭の池にそそいでいた。こちらは茶人、藪之内紹智によって、明治末期に設計されている。彼の茶道とキリスト教の関係を調べるのは今後の課題の1つである。

南禅寺大寧軒の三柱鳥居

[1] 2004年に、20代から30代の男女、280人を対象にアンケート調査を行った結果、約80%が七五三の経験をもっていることが分かった。

[2] 佐伯好郎『景教碑文研究』（大空社1996年）所収、「太秦（禹豆麻佐）を論す」21-50頁。この論文は同氏が明治41年1月に「地理歴史」に投稿したものである。佐伯説に対する批判も提出されているが、日本で初めて提唱された説としてここに紹介する。

[3] 織物で財を成した三井家（越後屋）は、この神社を守り神として崇め、江戸に進出する際には、全く（さながら）同じ形の三柱鳥居を江戸の屋敷（やしき）内に造り、後に向島の三囲（みめぐり）神社へ移した。木島神社の神服（はとり）宮司説。

[4] ネストリウスはコンスタンチノープルの司教であったが、キリストの神性に反対して人性を強調し、さらにマリアの「神の母」の称号を否認したため431年司教の座を追われ、異端宣告を受けた。エジプトに客死。451頃とされている。

上賀茂神社。賀茂別雷大神を祭神とする。6月30日に行われる夏越祓式の情景は、百人一首にある藤原家隆の歌「風そよぐ ならの小川の ゆふぐれは みそぎぞ夏の しるしなりける」に詠まれている。（撮影：澤村容子）

鞍馬寺。宗派はもと天台宗に属したが、1949年以降独立して鞍馬弘教総本山となっている。鞍馬は牛若丸（源義経）が修行をした地としても著名である。（撮影：高橋　徹）

南禅寺。臨済宗南禅寺派の大本山。三門(重要文化財)は五間三戸二階二重門の規模で左右に山廊をもち、禅宗（唐）様からなる雄大な建築である。（撮影：高橋　徹）

愛宕念仏寺。静まり返った境内には表情豊な羅漢さんが大勢置かれている。まだつくられて20年ぐらいである。（撮影：高橋　徹）

伏見稲荷大社の火焚祭。秋の収穫の後に五穀の豊饒をはじめ、万物を育てたもう稲荷大神のご神恩に感謝する祭典である。（撮影：高橋　徹）

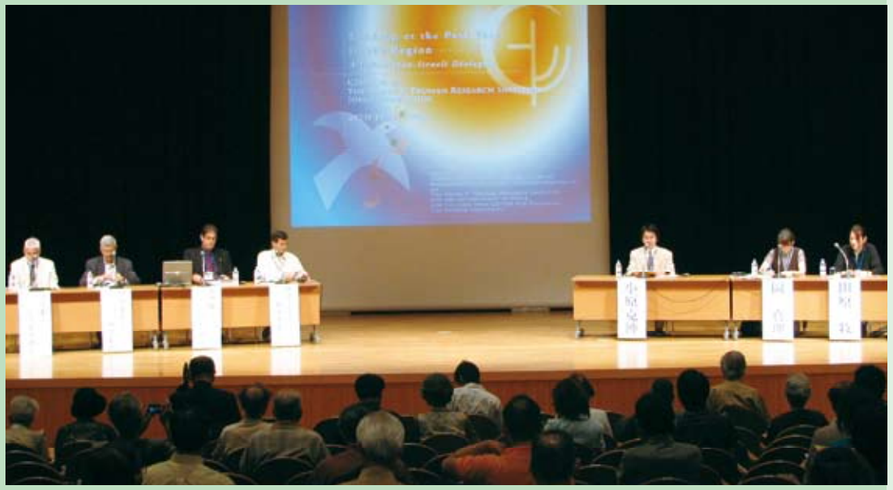
伏見稲荷大社。主に商業の願い事が「通る」或いは「通った」御礼の意味から、鳥居を奉納する習慣が江戸時代以降に広がり今でも健在である。現在は約1万基の鳥居がお山の参道全体に並んで立っている。（撮影：高橋　徹）

パレスチナ・イスラエル問題を考えるシリーズ

6月から7月にかけて、CISMORでは「パレスチナ・イスラエル問題」についての学びを深めるために、連続の公開プログラムを企画した。

第1回は、ロンドン在住のパレスチナ人政治学者のアッザーム・タミーミー氏（イスラーム政治思想研究所所長）の公開講演会、第2回はイスラエルのヘブライ大学に併設されているトルーマン研究所との共催の国際シンポジウム、そして第3回がエリ・コーヘン在日イスラエル大使による公開講演会であった。

イスラエルのガザ地区からの撤退は問題解決への進展とはならず、7月に入って、イスラエルのガザ地区への攻撃、そしてヨルダンへのイスラエル軍の進攻と、状況はますます混迷の度を深めている。



CISMOR・トルーマン研究所共催国際シンポジウム

3回の講演会とシンポジウムは、異なった立場の当事者から、直接、この困難な問題についての見解を聞くことを第一の目的とするものであった。

タミーミー氏はいわゆる「亡命パレスチナ人」の立場から、イスラエルの存在を否認し、ハマスへの支持を表明した。トルーマン研究所との共催のシンポジウムには、イスラエルから2名、ヨルダン川西岸のパレスチナ人自治区から2名の研究者が参加し、両者の見解をぶつけ合った。コーヘン大使は「自衛のための戦い」というイスラエルの立場を率直に語った。

「パレスチナ・イスラエル問題」についての歴史的、宗教学的、文明論的な基礎研究だけでなく、今日の現実の政治・外交的課題について研究することは困難な試みである。しかし、私たちのCOEプログラムは「一神教とその世界についての『学際的』研究」であり、「パレスチナ・イスラエル問題」は最重要の研究課題の1つである。今後も継続的にこの問題に取り組んでいきたい。

（同志社大学大学院神学研究科教授・一神教学際研究センター長　森　孝一）

公開講演会「中東紛争の根源」

日　時：2006年6月17日（土）　14:00−16:00
会　場：同志社大学　今出川キャンパス　神学館礼拝堂
司　会：森　孝一（同志社大学大学院神学研究科教授・一神教学際研究センター長）
講　師：アッザーム・タミーミー博士（イスラーム政治思想研究所（ロンドン）所長）

ユダヤ人は19世紀後半以来、ロシアやヨーロッパ各地で抑圧・迫害を受け、1933年のヒトラー政権成立から1945年の第二次世界大戦終結までは、ナチスによる大迫害に遭った。19世紀後半から始まったシオニズム運動はユダヤ人のパレスチナへの移住を推し進め、1944年から1947年にかけてはイルグンなどのユダヤ人武装勢力による武力行使を含めた様々な手段を駆使し、パレスチナの信託統治を行っていたイギリスをパレスチナからの撤退に追い込んだ。1948年5月14日にはイスラエル建国が宣言され、ユダヤ人国家が確立された。1948年のイスラエル建国の時にパレスチナを追われたパレスチナ人は84万6000人であり、1967年の第三次中東戦争においては、ヨルダン川西岸地区、ガザ地区なども占領され、より多くのパレスチナ人が住み慣れた土地を追われた。彼らは父祖の地にもどることを求めつづけてきた。また、イスラエル統治下に残ったパレスチナ人も困難な生活をつづけ、1987年には「インティファーダ」とよばれる抵抗運動が始まった。その後、PLO（パレスチナ解放機構）はイスラエルを承認し、1995年、イスラエルとのあいだにオスロ合意を締結した。これにより、ヨルダン川西岸地区とガザ地区におけるパレスチナ自治政府の部分的自治が実現したが、PLOとイスラエルのあいだで交渉が妥結せず、パレスチナ独立国家樹立には至らなかった。

2000年、アリエル・シャロンのアル・アクサ・モスク訪問強行を境に、第二次インティファーダが勃発し、シャロンの首相就任に至り、パレスチナ・イスラエルの衝突はいよいよ激しくなり、「ロード・マップ」と呼ばれたパレスチナ独立国家樹立のためのプランは実現から遠のいていった。イスラエル軍によるパレスチナ自治区への侵攻およびアハマド・ヤシン師などハマス指導者らの暗殺が相次ぐようになった。そうした中、2002年にはジェニンでの虐殺が起き、2004年にはPLOのアラファト議長が死去した。シャロン政権がパレスチナ側に対してとった政策は、イスラエル側とパレスチナ側の接触を制限する分離壁の建設、ガザ地区からの一方的な撤退、などである。

パレスチナ人は犠牲者なのであって、犯罪者ではない。イスラエルはパレスチナ人を抑圧している。この状況下で、イスラエルに妥協し、腐敗し、内紛に終始するPLOは、パレスチナ人全ての代表たりえなくなっている。パレスチナ人はエルサレムを奪回し、難民が帰還できるようにせねばならない。2005年、選挙で選出されたハマスこそ、PLOに代わって、真にパレスチナ人を代表するようになりつつある。ハマスは、1）ヨルダン川西岸地区とガザ地区からのイスラエル占領軍の撤退、2）ヨルダン川西岸地区とガザ地区に違法に設置されたユダヤ人入植地の撤去、3）イスラエルの監獄にいる全てのパレスチナ人の解放、と引き換えにフドナ（アラビア語で“休戦”）をイスラエルに対して提案する。休戦のモデルとして、北アイルランドや南アフリカのケースが参考となるであろう。

ハマスは、パレスチナの人々が初めて自由に選出した代表である。ハマスは、パレスチナの人々の尊厳と帰還の権利、植民地主義からの解放を目ざしつづける。汚職に満ちたファタハ、PLOとは対照的に、ハマスはクリーンで透明性があり、説明責任を果たす行政サーヴィスを行ってきた。ハマスの主張はイスラームに則ったものである。ハマスは、今後混乱を収拾し、独立した司法を確立して、法の統治と法の前の平等の原則を確立する。また、アラブおよびムスリムに対して欧米の恫喝に屈しないように求める。ハマスはイスラエルの監獄にいるパレスチナ人9000人が解放されることを最優先で要求する。ハマスは、パレスチナ人のための治安機関を再建する。今後、ハマスは困難な状況を克服し、その政治目標を実現していく。

（CISMOR奨励研究員・同志社大学神学研究科博士後期課程　塩崎悠輝）

CISMOR・トルーマン研究所共催国際シンポジウム「パレスチナとイスラエルの対話――この一年を回顧する」

日　時：2006年6月24日（土）　9:00－17:30
会　場：同志社大学　今出川キャンパス　寒梅館ハーディーホール、新島会館

■午前の部
司会:小原克博（同志社大学）
発表:サイード・ザイダーニー（アル・クドゥス大学）
　エヤル・ベン-アリ（ヘブライ大学）
　ワリード・サレム（パノラマセンター）
　マリオ・シュナイダー（ヘブライ大学）
コメント:岡　真理（京都大学）　田原　牧（東京新聞）
■午後の部
司会:アダ・タガー・コヘン（同志社大学）
発表:サイード・ザイダーニー
　「パレスチナ・イスラエル紛争の特異性と創造的解決案の必要性」
　エヤル・ベン-アリ
　「イスラエル、安全保障および解決への期待――ガザ撤退の回顧と展望」
　ワリード・サレム
　「新しい意味の中でのパレスチナのあり方に対する希望的戦略」
　マリオ・シュナイダー
　「イスラエル・パレスチナ間の平和はなぜ得られないのか?――イスラエル側からの意見」

イスラエル・パレスチナ地域は、過去何百年にもわたり、戦争と暴力、紛争の場であった。その地に住む人々は、イスラエル建国により生み出された憎しみと敵対心に今もなお苦しんでいる。歴史的・国家的発展が同じ土地の所有権をめぐって争う現状を引き起こした。

ヘブライ大学と同志社大学との間でとりかわされた学術協定のもと、CISMORとトルーマン平和研究所はイスラエル・パレスチナの現状に関するシンポジウムを共催した。トルーマン平和研究所は、特に中東に重点を置いて、非西欧諸国の歴史、政治、社会的発展に関する主な研究を支援するため、1965年に設立された。このように、この研究所は、対話の可能性と平和的解決を目的として、パレスチナ・イスラエル紛争に財源の一部をあてている。こうして、パレスチナ人とイスラエル人がそのような研究に参加し、相互理解の可能性を実現しようと対話を行っている。2006年6月24日のプログラムではそのような対話が試みられた。

1）発表の趣旨

サイード・ザイダーニー氏は、イスラエル・パレスチナ紛争ははじめは国内紛争であり、本質的に宗教紛争ではないという事実を強調した。それゆえ、氏は国という枠組みの中での解決案を模索している。この枠組みとは両者が心情的につながっていると感じられ、違和感なく自由に行き来できる、二つに分けられた場所を作るというものである。

エヤル・ベン-アリ氏は、イスラエルのガザ地区からの撤退に関する詳細について述べた。これは、イスラエルがパレスチナの領域をパレスチナ自身の国を作るために与える意志があるということを示している。氏は、その地域の平和的解決の可能性を見据えつつ、大多数のイスラエル人が問題となっている地域に立つ家を断念するという選択を強調した。しかし同時に氏は、過激派がガザの通りを支配するような一方的な撤退によってもたらされる軍事的な問題も指摘した。

ワリード・サレム氏はより現実的な案を提示し、イスラエルの政治的指導者と新たに選挙で選ばれたパレスチナのハマス政権が協議にこぎつけるためのいくつかの段階について述べた。同氏によれば、重要なのは、「イスラエルのオルマート首相とパレスチナのアブ・マーゼン首相が2000年の『クリントン・パラメーター』と呼ばれる合意案を双方の最終合意の基盤として採り入れることで共同声明を出す」段階であり、こうすることで双方が自らの行動に責任をもつであろうということである。氏はまた、「2つの地域の首脳会議を組織し、それに参加すべき第三者（エジプト、ヨルダン、トルコ、サウジアラビアといった地域からなるカルテット」の関与を推奨した。

マリオ・シュナイダー氏は、この政治的紛争の両者がとるべき最初の手段は、イスラエル社会が自らの複雑さを批判的な目で見ることであると強調した。氏は、イスラエル人が平和へのプロセスに着手する時に向き合う難問について概略的に述べた。氏はイスラエルの最も複雑な政治システムの他、ユダヤ人の中の「生活に根付く強い不安」、民族主義者と平和を求める人々の間で分断された社会を主に指摘した。それゆえ、氏は近いうちにこの地域に平和が訪れるとは考えていない。しかし氏は相互の話し合いが双方の将来のつながりとなるにちがいないと考えている。

2）閉会の辞

このシンポジウムにより、過去何百年も激しい紛争を続けてきた双方の識者間での対話の可能性が見えた。両者の間の溝がいまだ非常に深いものであることは明らかであるが、紛争を終結させる解決法を探る意志があることも明白であり、より多くの人にその可能性があることを納得させるため努力すべきである。両者とも、互いの痛みを認識することが、前進への重要な一歩であると強調した。これは実に重要なことであるが、おそらく互いに自身が犠牲者であると考えるのをやめ、各自の行動と将来に全面的に責任を負うことを受け入れるときに、より確実な第一歩が重要であろう。

（同志社大学神学部助教授　アダ・タガー・コヘン）

公開講演会「イスラエル――民主主義、宗教、そしてイスラエル・日本関係について」

日　時：2006年7月8日（土）　14:00－16:00
会　場：同志社大学　今出川キャンパス　神学館礼拝堂
司　会：森　孝一（同志社大学大学院神学研究科教授・一神教学際研究センター長）
講　師：エリ・コーヘン氏（駐日イスラエル大使）

エリ・コーヘン駐日イスラエル大使は2006年7月8日、同志社大学神学館で「イスラエル――民主主義、宗教、そしてイスラエル・日本関係について」と題し講演した。大使は1949年、エルサレム生まれ、ヘブライ大学卒業。国防大臣補佐官、国会議員を経て2004年から駐日大使。武道にも造詣が深い。同講演は、21世紀COEプログラム公開講演会としてCISMORが主催した。以下はその要約である。

イスラエルは1948年に建国の宣言を行なったが、建国の唯一最大の理由は2000年間、国家を持たず世界に分散してきたユダヤ人が平和に暮らす場所を持つということだった。建国宣言のほかに憲法はないが、ユダヤ国家であると同時に民主主義国家である。

ユダヤ教の伝統を重んじながら、かつ自由と平等を尊重する近代民主主義を並行させることは、問題や矛盾をはらんでいるともいえるが、実際のところ解決は容易である。というのも、イスラエル国民であれば、完全な宗教の自由があるからである。国民の宗教分布は87%がユダヤ教徒、17%がムスリム、残り2%はキリスト教、ドルーズ、チェルケス、バハーイー、モルモン教徒などで占めている。しかし、どの宗教の信仰、儀式とも尊重され、ユダヤ教への改宗を説得するとか、まして強要するなどということはあり得ない。もちろん、ユダヤ教の信仰にも程度の違いがあるが、国民の50%強は、必ずしも聖書が説く法にこだわらず、民主主義的な生活習慣を基本にしながら、必要な場合はユダヤ的伝統を守ろうとしている。

歴史的に見ると、1948年、アラブ諸国との戦争が勃発、49年に休戦したが、その際イスラエル国内にアラブ人約30万人が残る状態となった。それらの人々には完全に市民権が与えられている。ただ、市民権を欲しない人には強制しない。イスラエルの法律では男性は18～21歳の3年間、女性は2年間、兵役義務がある。アラブ人が市民権を得て、その結果兵役に就けば戦争相手国にいる兄弟姉妹と対決しなければならないかもしれない。そういうデリケートな問題があるからである。

去年、日本を訪れた一人のパレスチナ系イスラエル人の例をお話したい。彼は5年間、アラファト議長のアシスタント兼アドバイザーを務め、その後5年間、イスラエルの国会議員にもなった。イスラエルという国を裏切らない限り、自分の信じるもののために戦うのは自由である。実際には、国内でも複雑で理解し難いと思われた問題ではあったが、同時にイスラエルがいかに民主的な国家であるかを示していると思う。

1947年、デビッド・ベングリオン氏ら建国に携わった指導的な人々が建国後の困難を予想して、国家、宗教、民主主義をどう妥協させるか、今日まで影響を及ぼす重要な書簡をまとめた。特に安息日、食事、婚姻、教育の4点について触れている。しかし、戒律を守りながらも現実的便宜を図る傾向も広がりつつある。婚姻は、ユダヤ教、イスラーム、キリスト教など宗教の違いは問わないものの、宗教的儀式を経ないで弁護士や裁判官の前で署名、宣誓するだけの結婚は認められない。ユダヤ教、キリスト教、イスラームなど異なる宗教同士で結婚する場合は、男女のどちらかが改宗して2人とも同じ宗教になる必要がある。そこで今、キプロスへ行って弁護士の前で宣誓するだけの結婚をしてイスラエルに帰国するという方法が流行している。しかし、その場合も子供はどちらにするのか、という問題が残る。宗教政党が固執したので、イスラエルの航空会社である「エルアル航空」は土曜日は飛行機を運航しない。それでエルアルの飛行機を貸して「サンド」という別会社を設立し、曜日に関係なく関西空港にも乗り入れができるようになった。日本とイスラエルに関してはまた、小泉首相が今週イスラエルを訪問される。また今年11月に「サンド」航空で日本のVIP100人をイスラエルにお招きしたい。今後両国関係は飛躍的に緊密化するだろう。2006-2007年は両国観光年で、交流を一層拡大したい。

大使はこの後、来場者の質問に答えて中東紛争について語り「わが国は建国後58年間、平和を求めてきた。強いられた戦争を戦ってきたのである。9月にもわれわれは大きな妥協をした。ガザからイスラエル人1万人を移住させ、村もシナゴーグも解体し、土地をパレスチナ側に渡した」「ただし、ユダヤの伝統では個人個人が神を表すと考える。だから、兵士や市民が誘拐されれば、全力をあげて救出するのが道義であり非難されることではない」などの見解を述べた。

（同志社大学アメリカ研究科博士後期課程　田倉文雄）

石川　立

専門分野はいちおう「聖書学」です。「いちおう」というのは、「聖書学」を目標に研鑽を重ね、その学問の傾向や形に自らを合わせていく――というようなことを私はあまりしてこなかったからです。私は西洋哲学の学びから出発し、躊躇しながらも（キリスト教）神学の世界へと船出してきた知の旅人にすぎません。神学という大海の、最初に辿り着いたのがヘブライ語聖書という、樹木が鬱蒼と茂った島であり、続いて足を踏み入れたのが、それとほとんど陸続きの、新約聖書という、教会の建物を風景にもつ島だったのです。このような経過が背景にありますから、私は、近代の聖書学の方法論よりも、むしろ、中世の修道院の匂いがしそうな神学的な聖書解釈にこだわりを感じています。事柄を現存させると言われる聖書のことばに身をゆだねながら聖書の世界に遊び、veritasに触れる時を日々待ち望む者です。ユダヤ教もイスラームもveritasを想い目指す動きだとすれば、神学にとって共働の友です。

＊写真は小学4年生の息子と囲碁を打っているところです（石川家本因坊戦）。

四戸潤弥

イスラーム法とアラビア語文法の分野を研究対象領域としている。中東ではアラブ・イスラーム諸国の学生たちと寮生活を送りながら大学を卒業したことで、彼らのイスラーム理解と実践との関係を体験的に学ぶことができた。それは本に書かれたイスラームと、それを体現するイスラーム教徒、およびイスラーム社会との間にあるものを軸としてイスラームを体験的に理解するすことである。それはまた同時に日本を含めた非イスラーム社会、および非イスラーム教徒と、イスラーム情報との間にあるものを軸として、日本でイスラームを研究するために必要な手続きを進め、段取りをすることでもある。この2つの軸が私の研究の前提と思っている。その中で現在、強く感じることは、日本人のイスラーム理解での焦燥感というものである。古く、そしてより細やかな扱いが求められるべきであるはずの従来の固定的な日本人イスラーム理解と、現代の過激なイスラーム現象との間に深い溝が未だに埋められていないのが現実である。イスラーム情報がイスラームの現実理解を促進し、イスラームの現実理解がイスラーム情報へとつながることが一神教学際センター（CISMOR）の日本社会への貢献のひとつであると考える者としては、なすべきことを真剣に検討し、具体的に実行していきたいと考えて少しずつ準備を進め、実践している。

アダ・タガー・コヘン

古代研究にずっと魅力を感じていました。古代から3000-5000年後の時代に生きる人間として、古代の物語や文書を理解する方法を常に模索しています。聖書がヘブライ人の歴史を当時の他の民族と関連しつつ描いていると信じるようになり、それが私を更なる研究へと駆り立て、この分野の研究者となる後押しとなりました。シュメール語、アッカド語、ヒッタイト語、ウガリット語で書かれた法律書や歴史文書、そしてとりわけヘブライ語聖書に興味を持っています。文書を読み、比較し、古代の記録が社会、法律、歴史や生命のような重要なテーマについて私たちにどのように語りかけているのか、また彼らが死、戦争、平和をどのように考えていたのか、理解しようと努めています。これは私に、人類が世界をどう理解していたのかを教えてくれます。学生たちも、この古代文書の旅を楽しんでくれているものと思っています。

田原　牧

先日、社の先輩が彼に送られてくる邦文のニュースレターを見せにきた。発行団体に「MEMRI」とある。知らないかと尋ねる。

ああ、日本まで来たのかと思う。MEMRIとは「中東メディア調査研究所」の略。米国で知られるネオコンの宣伝機関で、その偏向ぶりには批判的な声が少なくない。

国会を今春、通過した入管難民法改正案。法相に「テロ」関係者を入国拒否する権限が加えられた。当局にパレスチナのハマースは対象に入るのか、と聞くと否定しなかった。

日本の位置が一神教対立に中立であるゆえ橋渡しをしたい、という望みを抱いて当研究会は始まった。しかし、この3年間でその前提は崩れつつあるのではないか。歯止め役を私たちメディア関係者、研究者がどれだけ果たせたのか。煩悶する日々が続く。

部門研究１「一神教の再考と文明の対話」研究会

第1回研究会（2006年5月13日）
場所:同志社大学　東京オフィス
大セミナールーム

“Interfaith Dialogue from Perspective of History of Islamic Civilization”
オスマン・バカル（マレーシア国際イスラーム大学教授）

2005年、国連のアナン事務総長より「文明間の連合」（“Alliance of Civilization”）の提起があったが、イランのハターミー大統領によって提起された「文明間対話」、および宗教間対話は、現代世界の諸問題解決のためにも依然として極めて重要である。

イスラーム文明は預言者ムハンマドのマディーナ移住によるその成立以来、宗教間対話の非常に豊かな伝統をもっている。預言者自身による他宗教との対話の先例もあり、中国、スペイン、中央アジアなどにおける宗教間対話の実践は、王岱與、イブン・アラービーらの著作のような大きな思想的、文化的成果へとつながっていった。マレーシアを含めた東南アジアでは、イスラーム（特にスーフィズム）とヒンドゥー、仏教の長い交流の経験がある。

イスラームが他宗教との対話を行ってきた動機は次の6つである。1）イスラームが最後の啓示宗教であるとの自己理解、2）クルアーンにある普遍的な啓示という概念、3）クルアーンに基づく包括的な神学、4）「啓典の民」であるか否かを判断する必要性、5）イスラームにおける「文明の借用」への積極性、6）イスラームの秩序における多元主義。

オスマン・バカル教授の発表に対し、手島勲矢氏（同志社大学大学院神学研究科教授）からは、マイモニデスら、イスラームの統治のもとで、亡命を余儀なくされた思想家について指摘があり、オスマン・バカル教授は、これに対して、対話が、紛争と同時に進行していたことを指摘した。また、手島氏はイスラームの包括性の範囲、一神教の範囲について質問したが、オスマン・バカル教授は、イスラームの包括性の範囲が多くの宗教を一神教とみなしうる、広範囲のものであることを指摘した。

川端隆史氏は、自身のマレーシアについての知見から、多民族の共存するマレーシアにおいては民族間、宗教間において、日常の中で対話が行われていることを指摘した。

第2回研究会（2006年7月29日）
場所:同志社大学　今出川キャンパス
寒梅館6階大会議室

研究会テーマ「キリスト教における世俗化・近代化に対する対応」
「キリスト教における世俗化・近代化に対する対応――カトリックの立場から」
マイケル・シーゲル（南山大学社会倫理研究所第一種研究員）
「キリスト教における世俗化・近代化に対する対応――宗教社会学の立場から」
三宅威仁（同志社大学神学部助教授）

今回の研究会は、「キリスト教における近代化・世俗化に対する対応」を主題として、マイケル・シーゲル氏がカトリックの立場から、三宅威仁氏が宗教社会学の立場からそれぞれ論じた。

シーゲル氏はカトリックにおける世俗化を論じるにあたり、まず「世俗化」という言葉が社会の様々な相における宗教の影響力の衰退を意味するとしつつも、むしろ教会が政治的権力を握ることが世俗化ではないかと問い、キリスト教における世俗化の議論とは、宗教と社会、政治、個人の関係のあるべき姿への問いであるとする。

そもそも世俗化とは西洋では啓蒙主義の産物であるとされ、啓蒙期の思想家が理性を信頼し宗教をその批判の対象とし、人間が自身と社会を改善し現世での救済を可能にすると考えたために、救済の手段を独占していた宗教はもはや不要になると理解された。

また氏は、英語の「secularization」とその訳語としての「世俗化」にある微妙な意味の違いをそれらの語源の違いから指摘する。「世俗化」の「俗」の対比語が「聖」であるのに対し、「secularization」の語源である「saeculum」は時間に関連する語であり、その対比語は「永遠」であるとする。氏はここにキリスト教における世俗化の特質が表れており、中世までのキリスト教は来世での救いに重点を置いてきたと述べる。つまり「secularization」とは来世から現世に注意を移すことなのであり、宗教が永遠（来世）を強調するのに対し、世俗化は現世に重きを置くことと理解されるのである。

そして氏はこのような世俗化に対し、カトリックは近代以降必ずしも否定的であったのではなく、それを歓迎もしたと述べる。それはより現世での救いというものに教会が目を向ける契機と理解されたのである。そしてシーゲル氏は、この意味で世俗化を理解する時、キリスト教における世俗化とはこの世への教会の使命の再確認を意味するものとなると指摘した。

三宅氏は、世俗化の諸理論が1980年代以前と以降では異なるとし、まず80年代以前について述べる。そこで氏は、近代社会学はそれ自体が世俗化の産物であると言え、その始まりから社会における宗教の重要性が減少するという見通しを持っていたと述べる。宗教社会学の創始者の一人であるヴェーバーは人類史において合理化が進展していくとし、プロテスタンティズムは世俗内部を呪術から解放して合理的につくりかえたとする。また初期のデュルケムは人間の連帯が類似に基づく機械的連帯から、違いに基づく有機的連帯に変わることで宗教の影響力は消失していくと考えた。

1960年代には近代化・産業化のもとで世俗化理論は盛んに論じられたが、氏は60年代の世俗化理論は概ね、世俗化が近代化に必然的に伴うプロセスであり、一方向に不可逆的に進展すると理解し、そのような西欧の経験は普遍的なパターンであると見られていたと述べ、またこの頃の世俗化という概念には多義的な意味が込められていたと指摘する。

しかし60年代末には、ルックマンによる宗教の私事化の指摘など、そのような理論を修正しようという試みが見られ、1970年代になるとイランのイスラーム革命をはじめ次々と政治の場における宗教の再登場が生じたことで、世俗化理論は変更を余儀なくされた。そこで80年代以降の世俗化理論は、不可避的、不可逆的な変化という理論を廃棄し、一定の条件下で社会が辿ると思われる傾向のみの指摘を行なったり（マーティン）、それまで多義的であった世俗化理論の分析レベルを明示する（ドベラーレ）などの方法がとられている。このような状況に対し、氏は、今後どのような理論が出されるにせよ、実証的研究の必要があると主張した。最後に三宅氏はウィルソンを引用しつつ、プロテスタント陣営の反応として、宗教協力、カリスマ的刷新、自発的な非構造化、合理化、折衷主義の5つの戦略がとられたと指摘し、発表を締めくくった。

部門研究2「アメリカのグローバル戦略と一神教世界」研究会

第1回研究会（2006年5月20日）
場所:同志社大学　今出川キャンパス
寒梅館6階大会議室

「米軍のトランスフォーメーション――アメリカの軍事戦略は変わったか」
山口　昇氏（防衛庁防衛研究所副所長（陸将補））

2006年の2月、4年ごとに提出を義務づけられているQDRという報告がアメリカで出された。日本でいえば「防衛計画大綱」と「中期防衛力整備計画」を合わせたものである。

そこに流れている一貫したテーマは「継続する変革」ということであった。変革にゴールはない、ということである。そして、テロとの戦いを「長い戦い」と規定した。これは、「戦争が泥沼化するだろう」という意味ではなく、「戦略をもって長い戦いを勝ち抜くぞ」という意識を表しているといえよう。また、そうした戦いのために、これまでと違って「国内外のパートナーとの協力」を重視するようになってきている。

今回のQDRでは、「4つの課題と重点分野」ということが示されていた。これは、アメリカがいまだに冷戦時代における「伝統型」の兵力整備から脱却しておらず、現在の「非正規型」「破滅型」「混乱型」といった危機に対応できていない、ということを問題としたものである。

「国防の変革」は以前から取り組まれていたが、ブッシュ政権が成立してからは、ラムズフェルド国防長官によって見直しが進められている。特に陸軍では、日系人初の陸軍大将であるシンセキ氏が参謀長となり、指揮統制組織のモジュール化などに着手した。

「米軍再編」についての基本的な考え方は「地球規模での態勢の見直し」ということである。例えば、一方で冷戦型の兵力を本土に帰還させ、他方で柔軟かつ迅速に展開できる兵力を世界中の戦略地点に配備する、というように「今後10年間で、より機敏で柔軟な軍を展開する」としている。こうした米軍再編の背景には、冷戦時代のように「在欧米軍であれば欧州を、太平洋軍は太平洋を守っていればよい」という時代は終わった、という認識がある。

今年2月の「2+2共同声明」でも、日米同盟における共通の戦略目標には、地球規模のものと地域レベルのものがある、ということが強調されていた。例えば、地球規模では「テロの防止・根絶」であり、地域レベルでは「朝鮮半島の平和的な統一を支持する」といったことである。そして5月に、在日米軍の再編に関する具体的なロードマップが合意された。今年のうちから様々なことが始まって、例えば、沖縄の人口密集地にある米軍の施設はほぼ全て返還されることになり、また厚木にある空母航空団は岩国に移されることになる。

ガイドラインについていえば、97年に見直されたままで、今では少々サビついていると言わざるをえない。これについては賛否両論があるが、周辺事態についてもさることながら、災害救援や復興支援についても計画を進めたらよいのではないか。どれから手をつけたらいいのかということは、今、決めなければいけないことだと思われる。

第2回研究会（2006年7月22日）
場所:同志社大学　東京オフィス
大セミナールーム

「米国の大量破壊兵器不拡散戦略とイランの核開発問題」
石川　卓（東洋英和女学院大学国際社会学部助教授）

90年代のアメリカの不拡散戦略の特徴は、大量破壊兵器（WMD）の拡散が進行中という前提の下、場合によっては軍事的手段を使ってでも、これに対処するという「拡散対抗」を打ち出したことであった。他方で、多国間枠組みの強化によって拡散の違法性をより明確化し、軍事的手段の正当性確保にも努めた。そうすることで、不拡散体制の強制的な性格を強化し、不拡散戦略の実効性を高めてきたのである。

現ブッシュ政権は、そうした90年代以来の不拡散戦略の傾向をエスカレートさせてきた。特に9・11事件以降は、「ならず者国家」を媒介としたテロ組織とWMDとのつながりを強調し、不拡散戦略の強制的な性格をさらに強化してきた。

その到達点でもあったイラク戦争は、不拡散という規範を逸脱する者に対してはある程度の威嚇効果をもったと言えよう。しかし同時に、武力を背景とした不拡散政策には限界がある、ということをアメリカに認識させることにもなった。国際社会においても、アメリカのやり方に対しては根強い不満があり、現在では、より多国間枠組みを重視せざるをえなくなっている。また、イラク戦争後には、テロ組織など、非国家レベルにおける拡散を「ならず者国家」脅威とは区別し、これにより注意を向けるようになった、とも言えよう。

その結果、アメリカの政策は、現実主義への傾斜を示すようになっている。イランの核開発問題へのブッシュ政権の対応にも、それは示されている。イランとの直接交渉の回避、濃縮・再処理をイランに認めないという姿勢は一貫しているが、EUやロシアによるイランとの交渉を従前以上に支持するようになっている。しかし、最終手段としての武力行使の可能性が低下している現状では、北朝鮮の核問題と同様、イランの核開発問題が長期化することも、ある程度はやむをえない。その意味では、現実主義への傾斜の是非は容易には判断できないとも言える。また、それは限定的なものにすぎず、イランの反応や北朝鮮核問題の動向次第で反転する可能性も十分にあるものと考えられる。

2006年度活動報告

4月18日ー7月11日
英語インテンシブ・コース

5月6日
特定研究プロジェクト5:研究会(1)
発表者:オスマン・バカル(マレーシア国際イスラーム大学教授)
"Modernization and Islam in Malaysia with Special Reference to Mahathir's Islamization Policy and Badawi's Islam Hadhari"

5月23日
特定研究プロジェクト3:研究会(1)
発表者:オスマン・バカル(マレーシア国際イスラーム大学教授)
"Islam and Science: An Alternative View of Study of Nature"

5月30日
特定研究プロジェクト2:研究会(1)
発表者:モハンマド=カーゼム・ムーサヴィー・ボジュヌールディー(イスラーム大百科事典センター所長)
「シーア派国家の成立過程:中世イスラーム世界を中心に」

6月4日
一神教学際研究センター・「宗教と社会」学会共催　公開シンポジウム
会場:同志社大学　今出川キャンパス　至誠館22番教室
テーマセッション1「一神教としてのユダヤ教・キリスト教・イスラームーー『原理主義』から見た相互認識」
テーマセッション2「『原理主義』の実相――中東・アメリカ・EU」

6月10日
一神教学際研究センター・日本オリエント学会共催　公開講演会
会場:同志社大学　今出川キャンパス　神学館礼拝堂
勝村弘也(神戸松蔭女子学院大学文学部教授)
「古代エジプトと聖書――知恵文学の比較を中心として」

6月17日
公開講演会
会場:同志社大学　今出川キャンパス　神学館礼拝堂
アッザーム・タミーミー(イスラーム政治思想研究所(ロンドン)所長)
「中東紛争の根源」

6月24日
CISMOR・トルーマン研究所共催国際シンポジウム
「パレスチナとイスラエルの対話――この1年を回顧する」
会場:同志社大学　今出川キャンパス　寒梅館ハーディーホール　新島会館

7月8日
一神教学際研究センター・神学部・法学部共催公開講演会
会場:同志社大学　今出川キャンパス　神学館礼拝堂
エリ・コーヘン(在日イスラエル大使)
「イスラエルーー民主主義、宗教、そしてイスラエル・日本関係について」

7月8日・15日
アラビア語インテンシブ・コース

8月1日
特定研究プロジェクト3:研究会(2)
発表者:松永俊男(桃山学院大学社会学部教授)
「ダーウィニズムと自然神学」

9月4ー25日
マレーシア異文化理解プログラム

10月3日-1月16日
英語インテンシブ・コース

10月21日
第3回研究会(部門研究1)「ユダヤ世俗主義の原型を探る:宗教と政治の関係」
発表者:河井徳治(大坂産業大学名誉教授)
「スピノザ:西欧思想史に見る異性体――その神観と倫理・政治思想」
発表者:飯島昇蔵(早稲田大学政治経済学術院教授)
"Machiavelli, Spinoza and Leo Strauss――Philosophy and Religion"

10月24日
特定研究プロジェクト2:研究会(2)
発表者:嶋本隆光(大阪外国語大学日本語日本文化教育センター助教授)
「M・モタッハリーの倫理思想」

10月28日
第3回研究会(部門研究2)「『9・11』5周年とイラク戦争の現状」
発表者:宮家邦彦(AOI外交政策研究所代表)
「米外交と中東情勢」
発表者:河野　毅(政策研究大学院大学助教授)
「暴力とテロリズム:東南アジアからみた米国の対テロ対策」

11月4ー5日
CISMOR国際ワークショップ2006
会場:同志社大学　今出川キャンパス　明徳館21番教室　新島会館
「『ヨーロッパ』という自己理解と一神教」

2006年度活動予定

12月2日
第4回研究会(部門研究2)

12月9日
第2回CISMORユダヤ学会議

12月11日
公開講演会
会場:同志社大学　今出川キャンパス　神学館礼拝堂
ファイサル・ハサン・トゥラード(駐日サウジアラビア王国大使)
「中東の平和と安定とサウジアラビア王国の役割」

12月16日
第4回研究会(部門研究1)

1月27日
第5回研究会(部門研究1・部門研究2　合同研究会)

編集後記

ようやく今年度第1号が発行となりました。諸々の事情により、予定よりもかなり遅くなってしまいました。早くから原稿を送ってくださった執筆者の方々には深くお詫び申し上げます。

さて、『CISMOR VOICE』は特集として都市(宗教と深い関わりのある)を取り上げてきました。これまで、エルサレム、カイロ、ニュー・ヨークと旅してきたのですが、今回は一神教学際研究センターがある京都です。センターの研究対象は主に、その名前が示すとおり、ユダヤ教、キリスト教、イスラームという、いわゆる3つの一神教(アブラハムの宗教)ですが、もちろん、他の宗教にも大きな関心を持っています。一神教と仏教や神道との関係(比較)も重要な研究テーマのひとつです。そこで、京都特集となりました。京都については宗教の観点から語ることがひじょうにたくさんあり、今号と次号(3月発行予定)の2回にわたって取り上げます。今回は一神教学際研究センターの客員フェローであるミシェル・モール氏と、元COE研究指導員である長谷川(間瀬)恵美氏にご寄稿いただきました。

先日、NHKの大河ドラマ「功名が辻」を見ていましたら、番組最後の「功名が辻紀行」で、一神教学際研究センターのある同志社大学今出川キャンパスの図書館前に南蛮寺の礎石があることを紹介していました。身近なところに、歴史的にたいへん貴重なものがあることにびっくりしました。次号では、この南蛮寺についてもふれる予定です。乞うご期待下さい。(ネアン)

来訪者記録

日付	氏名	所属機関
2006年		
4月5日	レインハード・ノイデッカー教授	ローマ教皇庁立聖書研究所
9月25日	モフセン・マーンデガーリー副編集長	イラン・ファールス通信
	ファルマン・アブダビ	
10月30日	ムハンマド・カリファ・ハサン・アフマド副学長	パキスタン・国際イスラーム大学

CISMOR事務局編集部
越後屋　朗　澤村容子　高橋晶子　高橋　徹　中村明日香
蜂須賀朋彦　藤田敦子

発　　行　同志社大学　一神教学際研究センター(CISMOR)
〒602-8580
京都市上京区今出川通烏丸東入
TEL 075-251-3972
FAX 075-251-3092
E-mail: info@cismor.jp
http://www.cismor.jp
編　　集　CISMOR事務局編集部
執筆協力　朝香知己　高尾賢一郎　藤本龍児
デザイン　有限会社真之助事務所
印　　刷　日本写真印刷株式会社

京都湯葉の魅力と歴史

京都の料理文化は歴史的にも奥深いものがあり、現在でもその奥深さは残っている。京料理といえば鯖寿司、鱧、にしんそば、京野菜、豆腐、麩など様々なものがあるが、今回は宗教的にも密接に関連する湯葉について紹介したい。

ゆばの由来については不明確な点も多いが、有力説としては中国から渡来した奈良時代の僧である鑑真が持ち込み、それが禅宗を中心とした幾つかの仏教宗派に受け入れられたというものである。また、宗教的な理由で肉や魚を食さない僧や修行者たちが、その代わりとして蛋白質を多く含むゆばを食べるようになった。ちなみに天台宗総本山比叡山延暦寺の宿坊での精進料理には、「比叡ゆば」という伝統的な湯葉まで千年以上前から食されていた。ゆばが中国から伝来してから、主に日本においてゆばの文化・歴史が根づいたのは、大別すると山岳宗教の盛んであった京都と日光の二箇所といえる。京都では「湯葉」、日光では「湯波」と呼ばれている。京都では光格天皇、考明天皇ならびに祐宮親王が古くから好んで口にしていた。つまり、京都における湯葉の起源は1200年以上前ということになる。また、「ゆば」という言葉の由来だが、ゆばの皺が姥（うば）の皺に似ていることからきたのだと言われている。

湯葉の素材と加工についてであるが、湯葉の素材はほぼ10割が大豆であり、その大豆を水につけてふやかし、次にかくはん機にかけて大豆をすりつぶす。すりつぶすと大豆が豆乳になり、豆乳ににがりを入れると豆腐になる。その後正方形の木枠に豆乳を入れて熱し、上部に豆乳の膜ができるのでそれを竹串で吊り上げる。その膜の部分が湯葉である。それを何度も繰り返すので、当然初めに吊り上げた湯葉は質が高いため高級湯葉となり、生湯葉（湯葉刺しなどの料理として使われる）として調理される。後に吊り上げられる湯葉は乾燥させて乾湯葉として調理されることも多い。また、後に吊り上げられる湯葉の種類としては平湯葉、棒湯葉などがあり、様々な用途で京料理として食卓に出される。

湯葉、特に生湯葉は昔から高級食材であり、最近まで「一般庶民」が食する機会はあまりなかったが、「創作料理」という最近新しく台頭してきた料理分野と適合し、安価ものまで広がり、多くの人も口にする機会が増えてきている。そのような理由もあり、京都や日光だけでなく、日本各地の都市部などではゆば料理を目にすることもしばしばある。最近はゆば料理の創作料理的な側面が強くなってきたため、京都では湯葉料理専門店なども見られる。また、大衆に湯葉料理を広げるために、湯葉料理も和洋折衷されたものなども増えてきている。さらに、栄養価としては非常に蛋白質が高いうえに低カロリーなので、ダイエット食品または菜食主義の人々にも多く食されている。京都の湯葉の起源はあくまで宗教的な理由から由来し、現在の僧及び修行者に食されているが、2006年の現在では世俗的な魅力で多くの人々から人気を集めているのも事実である。